

Ⅱ-6 京町地区

(図8参照)

1. (京町) 教育学部附属小学校管理棟新営に伴う支障配管工事に伴う立会調査 (1702)

<調査期間>

2017年4月17日～4月27日

<調査面積>

43.85㎡

<調査員>

大坪志子・土野雄貴・吉留 広

<調査概要・結果>

熊本地震で被害を受けた教育学部附属小学校管理棟の建て替えに際し、支障となる配管の盛替えに伴う工事立会である。小学校管理棟と小学校校舎A棟の間にある中庭付近の掘削をA地点、小学校正門から北へ延びる構内道路付近の掘削をB地点とした。4月20日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

A地点は給水管・ガス管盛替えに伴う掘削である。小学校管理棟西側の構内道路から小学校校舎A棟に至るまでの①と、管理棟と校舎をつなぐ渡り廊下に接する②に分

かれる。

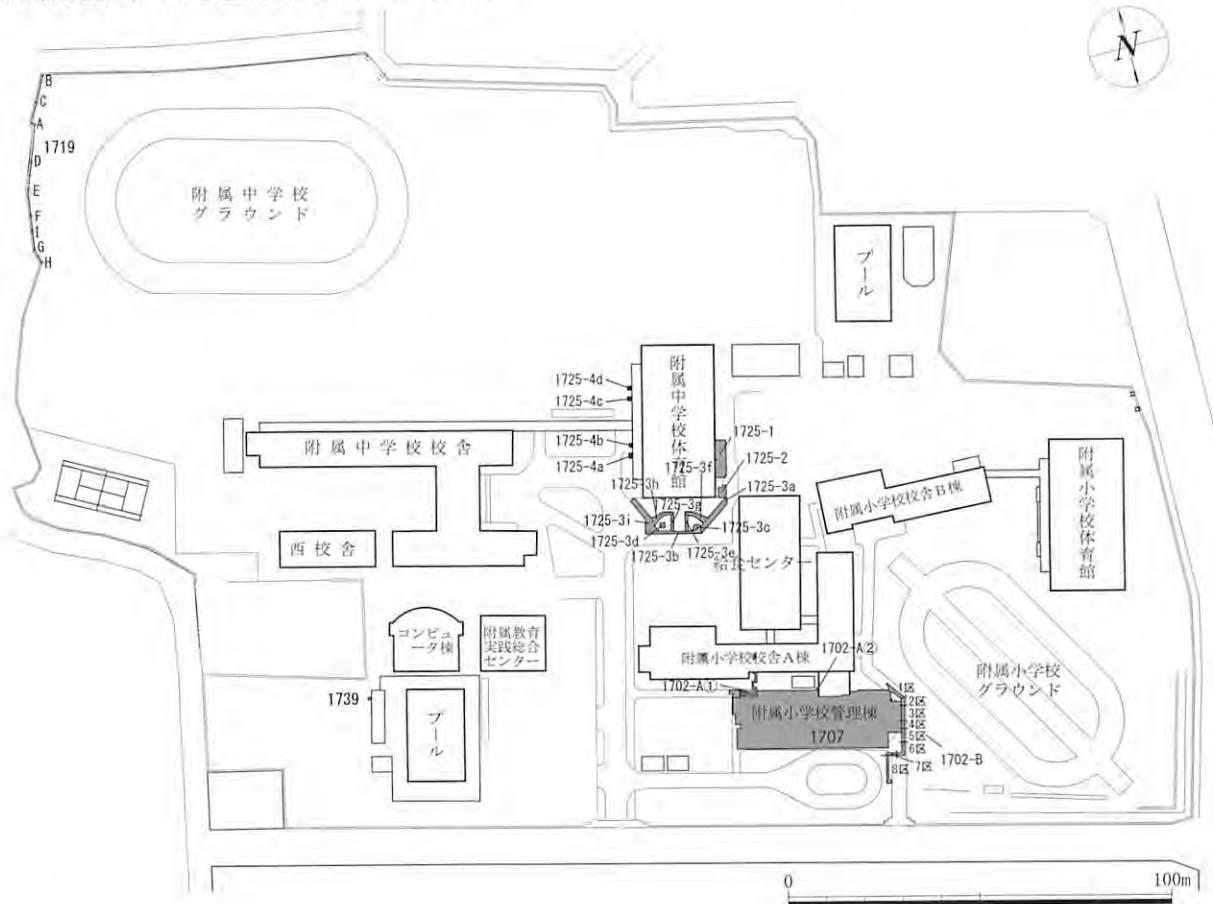
①は、構内道路部分1.95×2.8mのうち、既設樹を避けた南西隅0.9×0.9mを残して掘削した。掘方の南側から地表下0.7mで埋設状況を確認できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。中庭部分は、既設樹を避けながら東へ4.5m、北に6m、地表下0.4mを掘削した。幅は0.3～0.8mとまちまちである。掘削は現代埋土内にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。②は、既設管敷設状況確認のため0.5×0.5mを地表下0.5m掘削したが、既設管は存在しなかった。掘削は現代埋土内にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

B地点は雨水管・汚水管盛替えに伴う掘削である。8区に分けた。

1区は、小学校校舎A棟の東側にある既設雨水樹・汚水樹から南東へ6.4m進む。最初の1mほどは雨水管と汚水管の掘方が分かれているため0.6m幅だが、合流部分でやや広くなり、3m先からは1.0m幅となる。地表下1.0mで包含層を確認、合流部分付近から地表下1.1mでピット2基を検出した。

南に向きを変えて15.7mほどの直線部分のうち、2.2mまでの2区では地表下0.95mで包含層を確認、地表下1.05mでピット2基を検出した。

図8 京町地区における調査地点配置図 (1/2000)



6.4mまでの3区、8.4mまでの4区は、それぞれ地表下1.1mで地山を確認し、遺構は検出されなかった。

11.2mまでの5区では地表下1.0mで包含層を確認、地表下1.2mでピット3基を検出した。

南壁に突き当たって2m西までの6区では地表下0.75mで包含層を確認し、地表下1.1mで硬化面の広がりを検出した。

小学校管理棟南の既設雨水枡までの7区では既設工事の影響が大きく、雨水枡の手前0.8mの北壁際、地表下1.4mでごく僅かに地山を確認できたにとどまる。

この既設雨水枡から再び南へ折れ、7.5m先で東へ曲がる8区は、0.7m幅を掘削した。地表下0.9mで包含層を確認し、4.5m南から地表下1.0mで焼土を伴う硬化面を検出した。地表下1.1mでは、この硬化面に切られる別の硬化面を検出した。調査区西壁にピットの断面が認められる。焼土を伴う硬化面は、調査区西壁で柱痕をとどめるピットに切られていた。

狭い調査区であったが、京町地区における集落の範囲がこれまで想定されていたよりも南東側に大きく広がることを確認できた点は成果であったといえよう。

写真155 A地点①掘削状況（西より）



写真156 B地点1区作業風景（北より）



写真157 B地点6区硬化面検出状況（東より）



写真158 B地点8区焼土検出状況（南より）



2.（京町）教育学部附属小学校管理棟とりこわし 工事に伴う立会・発掘調査（1707）

<調査期間>

2017年7月3日～8月28日

<調査面積>

582.01㎡

<調査員>

大坪志子・土野雄貴。

<調査概要・結果>

2016年の熊本地震の被害を受けた教育学部附属小学校本館の立替工事に係る事業である。対象建物を取り壊す際に、基礎の間に遺跡が残存する可能性があることから、上屋を解体したのちに建物や階段等の基礎撤去前に立会及び発掘調査を実施した。また、同地点で新築工事の範囲が、旧管理棟の北・西・南に広がるため、新築に係る発掘調査範囲も同時に調査を実施した。

旧管理棟の基礎は、地中梁で大きく8つに分かれており、これを一区画として西から番号を付した。西側の①～③区画は遺物包含層が良好な状態で残っていたが遺物は少なく、検出された遺構はピット数個である。竪穴建

物らしき範囲もあったが、明確に判断できるものではなかった。④～⑧区画は、遺物包含層は削平されて残されておらず、遺構面も上面が削平されていた。ピットが数個と、⑦区画で南北の溝が1条検出されたのみである。

旧本館周囲では、旧管理棟の基礎（フーチング）工事の際に破壊された範囲を除くと、幅1m前後の狭長な調査区であった。もっとも攪乱が少ない地点では、地表下0.3～0.4mで、遺物を含む赤褐色の土層が検出される。既往の調査では、黒色土層が古代の遺物包含層で、これ

写真159 ②区完掘状況（南より）



写真160 ⑦区掘状況（南より）



写真161 南外周5区土器出土状況（北より）



写真162 南外周5区完掘状況（北より）



写真163 南外周4区遺物出土状況（西より）



より以下を調査してきたが、褐色の土層は古代の遺物包含層の上に0.6m前後堆積しており、古代の遺物を含む。ただし、含まれる土器片は碎片が多く、今後時期の精査が必要である。南側では古代の時と弥生土器が出土し、ピット・土坑・竪穴建物が検出された。竪穴建物は、壁を確認できるものがなく、全容の把握は難しかった。北・西側では、ピットが数個確認できたのみである。

3.（京町）工作物災害復旧工事に伴う立会調査（1719）

<調査期間>

2017年11月8・9日

<調査面積>

88.90㎡（9,645㎡を調査）

<調査員>

新里貴之

<調査概要・結果>

附属小中学校敷地内の、熊本震災の影響で傾いたフェンスおよび民家と接するブロック塀傾斜を復旧するための工事に伴う立会調査を実施した。

附属中学校グラウンド北西隅境界部分のフェンス工事

は、新たにフェンスの支柱基礎部分を掘削する工事であり、計29か所の掘削予定であったが、数か所を掘削し、遺物包含層および遺構の確認された時点で周辺の掘削部を増やすという方法で調査を実施した。結果、9箇所を掘削し（A～I地点の順に掘削）、5箇所で遺物包含層および遺物小片を確認できた。以下、北から地点別に土層の様子と遺物について概略を記す。

B地点は最も北に位置し、幅1.5×0.8m範囲で深さ0.9mを掘削した。土層の残りは悪く、地表下0.56mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

C地点はB地点から6m南に位置し、幅1.1×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削し、地表下0.49～0.54mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

A地点は、C地点より南に6m、東に1.5mの地点で大きなクランク部分に相当する、幅1.15×0.9m範囲、深さ0.85mを掘削し、地表下0.3mで黒色土層（2層）、地表下0.55mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

D地点は、A地点より10m南に位置し、幅1.2×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削し、地表下0.3mで黒色土層（2層）を確認した。土層幅0.6mほどの厚みで確認されたものの、明確に分層ができず、また、遺構・遺物は確認されなかった。

E地点は、D地点より8m南の緩いクランク部分に位置し、幅1.5×0.9m範囲、深さ0.72mを掘削し、地表下0.24mで黒色土層（2層）を確認した。ここは2a層と2c層（地表下0.49m）に分層できたが、遺構は確認されなかった。遺物は2a層から土師器小片が2点出土した。

F地点は、E地点より6m南に位置し、幅1.2×0.9m範囲、深さ0.72～0.77mを掘削した。地表下0.34mで2a層、地表下0.5mで2b層、底面で2c層が確認された。東壁で攪乱の土坑が底面レベルまで達していたほかは、遺構は確認されなかった。2a層で土師器小片6点出土した。

I地点は、F地点より4m南に位置し、幅1.3×0.9m範囲、深さ0.75mを掘削した。地表下0.45mで2a層、底面で2b層が確認された。遺構は確認されなかったが、2b層で土師器小片等10点出土した。

G地点は、I地点より6m南に位置し、幅1×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削した。地表下0.35mで2a層、地表下0.66～0.78mで2b層が確認された。遺構は確認されなかったが、2a層で土師器小片1点、須恵器小片1点、2b層で土師器小片4点出土した。

H地点は、最も南に位置する基礎部で、幅1.3×0.9m、地表下0.75mまで掘削した。全て2a層に類似した土層で

あったが、所々にガラスや現代陶器、セメントなどを含んでいたため、表土・攪乱層と判断した。底面で土師器杯1点および土師器小片2点出土した。

A～I地点の状況からは、旧地形は北から南に傾斜しており、包含層に大きな影響はないものと判断した。残りの掘削工事は慎重に進めるように指示し、調査を終了した。

基本土層は以下の通りである。

2a層：黒褐色10YR2/2シルト。土器細片や木炭を含む。かなりしまり良い。土器小片がわずかに出土する。

2b層：黒褐色10YR2/2シルト。しまりが良く、わずかに遺物小片を含む。

2c層：黒褐色10YR2/2類似（やや明るい）シルト。しまりが悪く、遺物をほとんど含まない。

3層：褐色7.5YR4/4シルト。まれに暗赤褐色5YR3/6の小礫を含む。基盤のローム層。遺物なし。

附属小学校と民家の境界になるブロック塀地点は、ブロック塀に沿って、幅1.4×0.6m、地表下0.3mの掘削を実施した。結果、表土の範囲内におさまり、包含層に直接の影響はないと判断し、調査を終了した。

附属中学校のフェンス部分に関しては、南に行くほど良好な包含層が残存している可能性が高いため、工事に際しては慎重な対処が必要となると考えられる。

写真164 C地点掘削（北より）



写真165 A地点東壁土層（北西より）



写真166 D地点東壁土層（北西より）



写真167 E・F地点作業風景（北東より）



写真168 E地点東壁土層（北西より）



写真169 F地点東壁土層（北西より）



写真170 H地点東壁土層（北西より）



写真171 附小民家ブロック塀作業風景（南より）



4. (京町) 教育学部附属中学校給水管補修工事に伴う立会調査 (1739)

<調査期間>

2017年9月1日

<調査面積>

0.53㎡

<調査員>

大坪志子.

<調査概要・結果>

教育学部附属中学校のプール付設シャワー室の水道管の補修工事である。緊急対応として熊本市文化振興課に許可を得た。指導は慎重工事であるが、センター職員が立ち会った。

シャワー外壁から外にある止水弁までの約0.8×0.66mの範囲を掘削した。深さは地表下0.6mである。既存の水道管を切断して新しい管と交換するものである。埋土内で作業が可能であることを確認した。

写真172 作業風景 (南西より)



写真173 掘削状況 (西より)



5. (京町) 教育学部附属中学校体育館改修その他工事に伴う立会調査 (1725)

<調査期間>

2018年1月11・18日、2月13～16日

<調査面積>

260.17㎡

<調査員>

土野雄貴.

<調査概要・結果>

教育学部附属中学校体育館の改修その他工事に伴う工事立会である。1月11日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

体育館東側の多目的トイレ新設箇所を1区、屋外階段部分を2区、南側正面入口周辺を3区、西側階段下を4区とした。

1区は現代の影響を強く受けていたが、精査の結果、地表下0.3m付近で住居跡1・ピット3・栗石分布1を確認した。

2区は地表下0.28mで地山を確認し、ピット2・栗石1を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。

3区は、中学校体育館南側の比較的広い調査区である。9小区に細分したが、このうち遺構を検出したのは3b・3hの2箇所であった。3aは12×1.5m、地表下0.28mを掘削した。体育館の南4m付近までしかまとまった地山は確認されず、大半を現代掘方が占めていた。3bは15×0.8m、地表下0.26mを掘削した。3aとの接点から西へ3.5mまでの範囲にピット2・土坑1を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。3cは樹根撤去に伴う掘削である。幹から半径1.5mほどを地表下0.3m掘削したところで撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。3dも樹根撤去に伴う掘削である。幹を中心に2×2m、地表下0.45m掘削したが、撤去の過程で抜取り痕が生じた。地表下1mまで及んだが、現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。3eは3.7×0.7m、地表下0.26mを掘削した。3bから1m付近でわずかに地山を確認したほかはすべて現代掘方であった。3fは変則的な形状をしているが、おおむね1.3～2.0×6m、地表下0.38mを掘削した。大半を現代掘方に切られており、中央付近で1.5×0.5mほど地山を確認したにとどまる。遺物は出土していない。3gは4.6×0.7m、地表下0.26mを掘削した。大半を現代掘方と花壇基礎に切られており、中央付近で地山をわずかに確認したにとどまる。遺物は出土していない。3h

は1.8~2.8×6.5m、地表下0.38mを掘削した。西側からピット4基を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。3iは長さ12m、南西隅は三角形に広がるがおおむね幅1.5m、地表下0.28mを掘削した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

4区は、体育館西側の歩廊に設けられた2箇所の階段改修に伴い基礎を新設するための掘削である。4aは0.8×0.6mを掘削した。地表下0.31~0.39mで硬化面を検出した。4bは0.94×0.8mを掘削した。地表下0.28mで地山を確認した。大半を現代掘方に切られており残りは良くない。北側の掘方から銅銭が1枚出土した。腐食がひどく文字は読み取れない。4cは0.8×0.6mを掘削した。地表下0.28mで栗石と、その掘方に切られるプランを1基検出した。溝とみられるが遺存状況が良好ではなく、遺物も出土していないことから詳細は不明である。4dは0.8×0.8mを掘削した。地表下0.26mで栗石を検出した。

部分的な確認にとどまったが、当調査区は0719・0721調査区と1417・1443調査区の間に位置しており、両者を補完するものといえよう。

写真174 1区作業風景（南より）



写真175 1区遺構検出状況（南より）



写真176 1区住居跡完掘状況（南より）



写真177 4a・4b調査区近景（北より）



写真178 4a硬化面掘削状況（南より）



Ⅱ－7 新南部地区

(図9参照)

1. (新南部) 加工舎取り壊し工事に伴う立会調査 (1732)

<調査期間>

2018年3月7・22日

<調査面積>

80.92㎡

<調査員>

士野雄貴

<調査概要・結果>

教育学部附属新南部農場における加工舎の解体、および加工舎周辺の樹根撤去に伴う工事立会である。

樹根①は幹を中心に2.4×2.4mの平行四辺形状に掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根②は2.2×2.2mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根③は2.2×2.2mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根④は2.3×1.9mを掘削し、地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。掘方北端は加工舎基礎に南接しており、トレンチもかねて基礎脇を掘削すると、地表下0.3mで基礎底部を検出した。逆丁字状で、0.07m外側へ張り出し、0.2m幅の掘方がある。地表下0.42mで基礎下割石を検出し、地表下0.6mで地山を確認した。遺構の検出はないが、土師器を数点出土した。

樹根⑤は2.4×2.4mの掘削だが、掘削範囲の南西隅に屋外洗い場の基礎が存在するため一部狭くなっている。地表下0.32mまでの掘削で撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

樹根⑥は5本が近接しており、周囲を取り囲むようにレンガが埋め込まれていた。5本のうち4本は掘削することなく撤去できたが、残り1本について幹を中心に1.6×2.2mを掘削し、地表下0.24mまでの掘削で撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

樹根⑧は上辺2.3m下辺1.9m高さ1.7mの逆台形状に掘削した。地表下0.3mで包含層を確認し、地表下0.39mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根⑩は1.6×2.0mを掘削した。地表下0.32mで包含層を確認した。地表下0.4mまでの掘削で撤去できた。

近世陶磁器片を1点出土した。

樹根⑫は2.1×2.3mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できたが、西壁から約0.4m幅で遺構の一部とみられるプランを検出した。大半は調査区外へ広がるとみられ詳細は不明である。土師器数点を出土した。

樹根⑦⑨⑪は掘削することなく撤去できた。

加工舎の基礎撤去に伴う掘削では、当初は基礎の両側を0.8m幅で掘削、底部を露出させ撤去する計画だったが、樹根④撤去時の結果から片側だけの掘削で撤去可能と判断し、掘削方法を変更した。外壁は内側、梁は東側・南側を掘削したが、造りつけカマドの部材にダイオキシソ汚染が確認されたため別途搬出することになり、その便宜を図るため加工舎の東壁と北壁については建物外側を掘削した。西壁横を掘削中に遺構を検出し、現地での協議の結果、掘方埋土を掘削し基礎下部を露出すれば撤去可能であると確認でき、掘削を回避することができた。西壁横では、北側は地表下0.39mで包含層を確認、北端1.5m付近から地表下0.21～0.38mで遺構を検出した。東側で1.3m幅、西側で0.6m幅を測る。近世とみられる。梁部分では、北側では地表下0.27m、南側では地表下0.26mで包含層を確認したが、横梁部分は地表下0.38mで包含層を確認した。南壁横では、西側は地表下0.49mで包含層を確認した。東側は地表下0.4mで現代埋土であった。東壁横では、北側は地表下0.28m、中央付近は地表下0.36mで包含層を確認した。北側1m付近の0.4×0.4mの桝は掘削なしに撤去できたが、掘方を観察した結果地表下0.35mで包含層、地表下0.59mで地山を確認した。北壁横では、地表下0.28～0.3mで包含層を確認した。加工舎中央北側の地下貯蔵庫跡は、地表下0.5m付近で破砕撤去し下位は残置することになっていたが、基礎と地表土との間に0.1m程度の隙間が見えていたことから遺跡へ影響を与えず作業可能であることを確認し、慎重工事を指示して立会を終了した。

工事立会中、樹根①⑥周辺をはじめ、加工舎東隣の農夫舎横に積み上げられたものなど相当量のレンガを目にしたが、前述のカマドの部材を除いてはすべて「熊本監獄」銘のレンガであった。新南部農園は昭和31年(1956)、教育学部の黒髪移転後新たに取得し整備されたという経緯から1次利用であるとは考え難く、黒髪地区で解体されたレンガ建物の部材を2次利用したものと思われる。

図9 新南部地区における調査地点配置図 (1/1250)

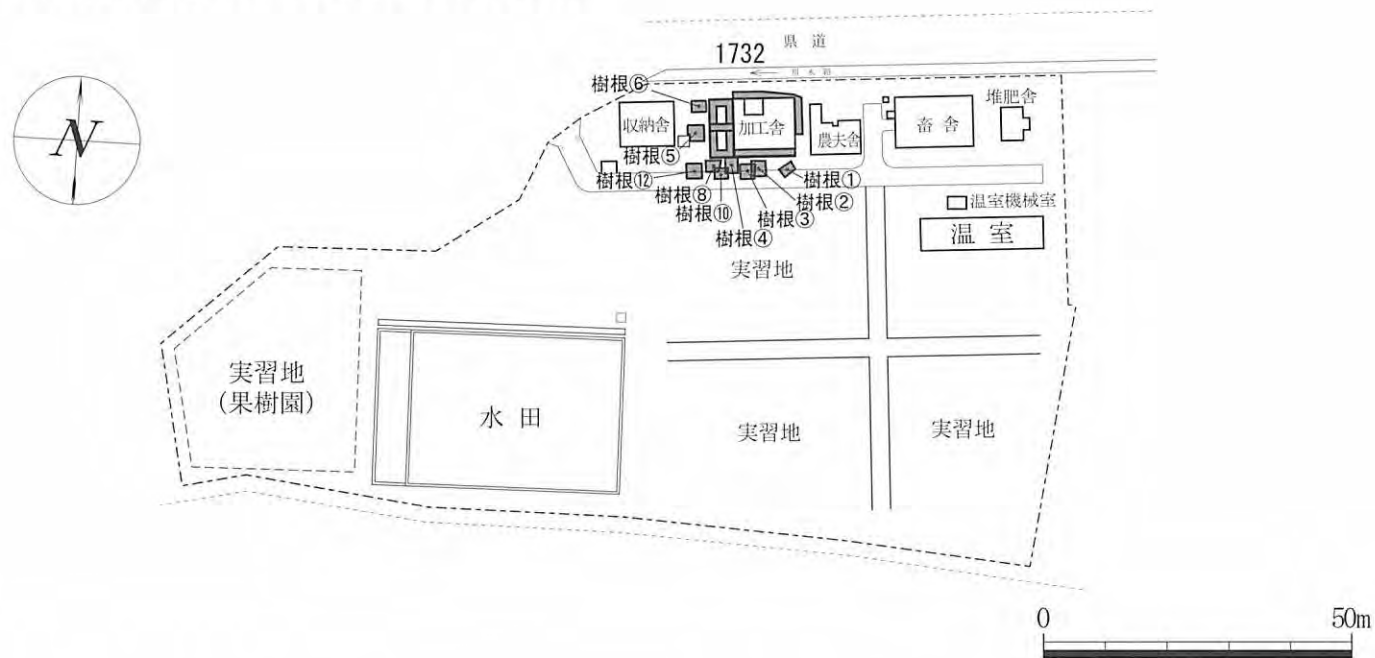


写真179 調査区近景 (南西より)



写真181 加工舎西壁横遺構検出状況 (南より)



写真180 樹根⑫撤去完了状況 (東より)



Ⅱ－8 城東地区

1. (城東町) 教育学部附属幼稚園管理棟遊戯室災害復旧工事に伴う立会調査 (1710)

<調査期間>

2017年8月28日

<調査面積>

0.18㎡ (2.08㎡)

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

教育学部附属幼稚園の敷地の南にある塀に沿って、フェンスを設置する工事で、基礎の掘削に立ち会った。

基礎は2m間隔で13箇所設置予定である。この中で3箇所を試掘した。東側の①トレンチでは、地表下0.35mでロームと考えられる粘土層が検出されたが、その下位より焦土が検出され、プライマリーな土層ではない。予定の地表下0.55mまで掘削したが、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

写真182 ②地点作業風景 (東より)



写真183 ①地点掘削状況 (東より)



写真184 ②地点掘削状況 (東より)



写真185 ③地点掘削状況 (東より)



工事範囲の中央、②トレンチは、表層(厚さ0.25m)が砂層、その下は厚さ5cm程の砂利の層、その下はやはり砂層であった。表層の砂は砂場の跡かと考えられ、砂利の下の砂は黒色の粗粒で洪水砂のようであった。本地点でも、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

西側の③トレンチでは、砂の表層(厚さ0.1m)の下に、①トレンチで確認した粘土層(厚さ5cm)があり、その下は砂層であった。この砂は細粒で、海砂のようであった。本地点でも、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

Ⅱ－9 渡鹿地区

(図10参照)

1. (渡鹿) 教育学部倉庫新営電気設備工事に伴う立会調査 (1729)

<調査期間>

2018年2月21日～23日

<調査面積>

49.5㎡

<調査員>

吉留 広

<調査概要・結果>

教育学部倉庫の新営にあたって管理棟から電気を引くため、埋設配管・ハンドホールを新設する工事に伴う立会調査である。

ハンドホール新設のための掘削は2箇所あり、1箇所目は既存倉庫の南西端から南側に5.2mのところを2×2mの範囲で地表下1.3mまで掘削した。途中深さ0.8～1.2mで給水管と思われる鉄管を確認したが、現在使用していないことがわかったため撤去した。また、地表下1.2mのところ東壁に半分ほど埋まる形でヒューム管がみつかった。工事には支障がなかったため、現地にとどめることとした。掘削範囲内は鉄管やヒューム管の掘方埋土内におさまった。しかし、底面からは黒色土の地山と思われる層を確認した。遺構・遺物の検出はなかった。

2箇所目は管理棟の南西端から西側へ8.9mのところを2×2mの範囲で既定の地表下1.3mまで掘削した。途中、深さ1mのところロームが多く混じる非常に硬く締まった層を検出した。直上に瓦が張り付いていたため、新しい時期のものかと判断し、範囲を記録した後既定の深さまで土を観察しながら掘削していくと、ロームが多く混じる層の下層は順に、礫を多く含む灰黄褐色土の層、ロームが多く混じる層、礫を多く含む黒褐色土の層となっており、さらにこの層の下からは一部、ロームを多く混じる層が顔を出したことから、互層積みをおこなっている様子がうかがえた。当該地点は終戦時まで工兵第六連隊の兵営が置かれており、これらの土は兵営が建っていた時期の造成土である可能性がある。

埋設配管配線新設箇所は、管理棟の南西端から2箇所目の桝までを繋ぐルート・2箇所目から1箇所目のハンドホールに繋ぐルート・1箇所目のハンドホールから新設する教育学部倉庫に繋ぐ北西に延びるルートがある。掘削は1m以内でありハンドホール箇所の掘削状況から包含層に影響はないと考えられ、慎重に工事をおこなう

ように指示した。しかし、管理棟から2箇所目のハンドホールにつながるルート箇所はハンドホールから管理棟にかけて地形が下がり1m掘削すると包含層への影響が考えられたため調査をおこなうこととした。

幅0.9×4mの範囲を掘削したところ、管理棟南西端から西側0.6～1.2mにかけて地表下0.8mのところ黒色土の地山を検出した。工事は0.8mの深さがあれば施行できるとのことであったためそれ以下を掘削しないように指示し調査を終了した。

写真186 No.①調査区近景 (南より)



写真187 桝①掘削状況 (北より)



写真188 桝②掘削状況 (東より)



図10 渡鹿地区における調査地点配置図 (1/2000)

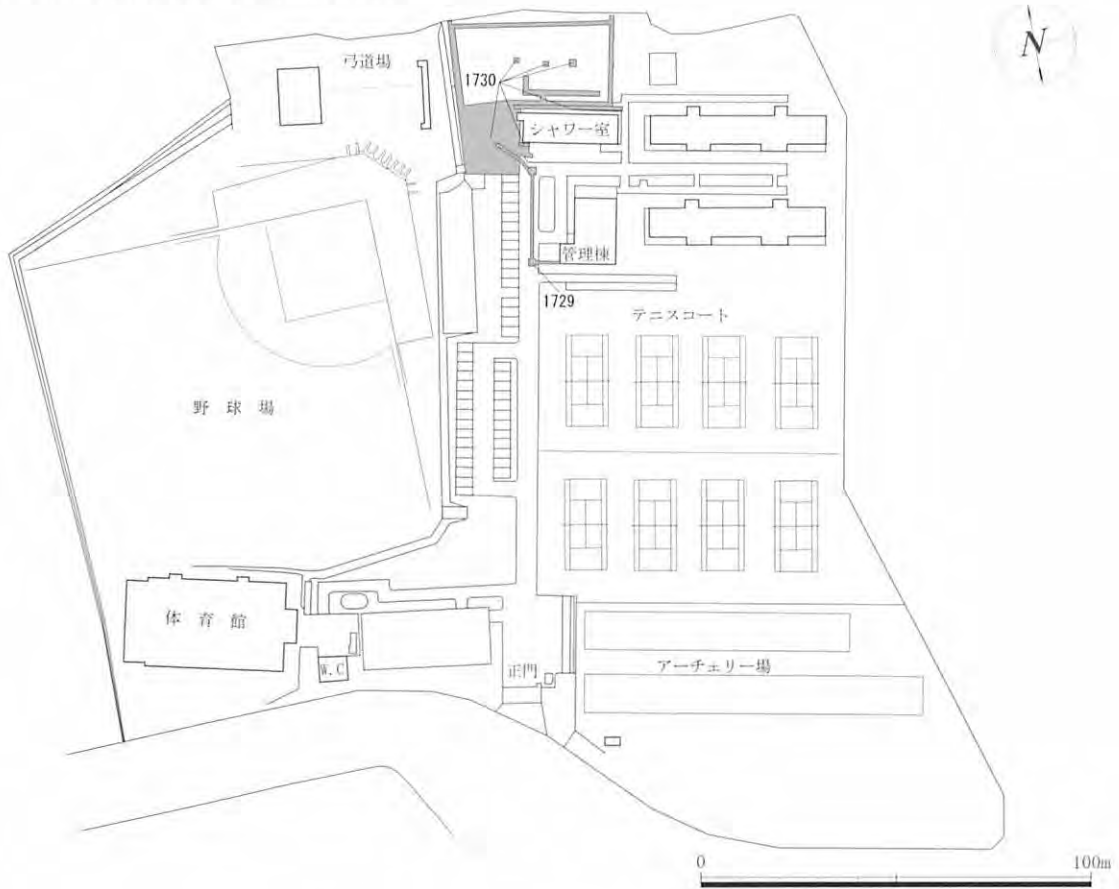


写真189 管理棟西側箇所掘削状況 (南西より)



2. (渡鹿) 教育学部倉庫新営その他工事 (建築・機械設備) に伴う立会調査 (1730)

<調査期間>

2018年2月21・22日

<調査面積>

562.5㎡

<調査員>

吉留 広.

<調査概要・結果>

教育学部倉庫新営にあたり建築・機械設備に係る立会調査である。本工事で掘削を伴う工事箇所として①建物布基礎箇所②建物柱基礎③建物ビット箇所④給水管・排水箇所⑤排水管・ガス管箇所⑥コンクリートブロック門柱基礎箇所⑦土間・縁石箇所があった。これらの工事の中で最も掘削深度を要する④の既存倉庫の北側箇所と南西端箇所を先に調査し、その他の箇所は状況を見て判断することとした。

既存倉庫北側箇所は倉庫の東端から北側に1.8m、東側に4.1mのところにある桝と既存倉庫の西端から北側に1.7m西側に0.8mのところにある桝に排水管を繋ぐための掘削である。地表下1mから0.7mになるように東側から西側へ徐々に高くなるように勾配をつけ、1.3×31.7mの範囲を掘削した。東側の桝から西側に0.2mは桝の掘方となっており、そこから西側7.6mにかけて地表下0.9mのところ暗褐色の近世包含層と思われるものを確認した。近世包含層と思われる層を切る形で西側7.6～9.2mにかけて灰褐色の層が確認された。この層からはコンクリート片は見られなかったが、9.2mから以西はコンクリートを含む現代の埋土に切られていた。灰褐

色の層は西側に立ち上がりが見られなかったため、広がりには確認できなかったが、近世から近現代の溝か落ち込みの可能性がある。東側は地表下1mの掘削予定であったが0.9mあれば工事が施工できるということであったため、包含層の掘削はしていない。遺構・遺物の検出はなかった。

既存倉庫の南西箇所は、倉庫の南西端から南側に0.5mいったところを基点に東側へ0.7m、西側へ3.6mの長さ4.3mを幅1mの範囲で地表下0.75mまで掘削した。範

写真190 倉庫北側給水・排水管箇所東側作業風景（北東より）



写真191 倉庫南西端給水・排水管箇所掘削状況（東より）



写真192 倉庫北側給水・排水管箇所掘削状況（東より）



囲内にはフェーム管や塩ビ管が4本入り組んでおり全て掘方埋土内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。そのほかの①～③、⑤～⑦の工事は深さが0.8m以内におさまることから、包含層への影響はないと判断し慎重に工事することを指示し調査を終了した。

写真193 排水管箇所南壁土層断面（北東より）



Ⅱ-10 渡鹿地区（宿舎）

1.（渡鹿2）渡鹿住宅2号棟屋外ガス管改修工事に伴う立会調査（1731）

<調査期間>

2018年3月6日

<調査面積>

1.55㎡

<調査員>

士野雄貴.

<調査概要・結果>

渡鹿住宅2号棟の屋外ガス管改修工事に伴う立会調査である。

2号棟の東側、1.55×1.0mを掘削した。地表下0.5mでコンクリート製基礎を検出した。調査区のほぼ中央を縦断しており、0.2m幅で上部に凹凸はない。地表下0.7mでL字状の下部構造を検出した。塀の基礎と考えられる。コンクリートの密度は低く、レンガ片が混入するなど粗悪である。基礎の下は0.1mほど現代埋土が入る。西壁付近から地表下0.8mでガス管の止栓部を検出した。掘方の外側は近代整地層である。地表下1.37mまで掘削したが、遺構・遺物の検出はない。これ以上の掘削はないことを確認して立会を終了した。

写真194 調査区近景（南より）



写真195 土層断面（北より）



Ⅱ-11 新屋敷地区

（図11参照）

1.（新屋敷1）新屋敷1号宿舎取り壊し工事に伴う立会調査（1737）

<調査期間>

2018年3月26・28日～4月3日

<調査面積>

69.66㎡

<調査員>

士野雄貴.

<調査概要・結果>

熊本地震により被害を受けた新屋敷1号宿舎の取り壊しに伴う工事立会である。熊本市教育委員会による新屋敷遺跡群第36次調査（以下「市36次調査」）と隣接している。宿舎および水道管・ガス管・門・樹木が撤去対象となった。

観察の結果、層序は5層に分かれる。

1層は現代とした。市36次調査のIa・Ib層に当たる。

2層は大量の炭・焼土、強い2次焼成を受けた瓦を伴っており、空襲痕跡と判断し近代とした。市36次調査のIc・IdおよびIIa層に当たる。

3層は近世とした。市36次調査のIIb層に当たる。

4層は古代とした。市36次調査のIII層に当たる。

5層は遺物を伴わなかったことから立会時には地山としていたが、市36次調査のIV層に相当することから縄文～古代の下位包含層とした。

建物基礎は、撤去に先立ち5箇所を基礎際0.35m幅掘方埋土内を掘削し確認したところ、底部まで断面形状の変化はなく、その下位は栗石層であった。栗石層までの深さは地表下0.25～0.32mである。栗石は撤去対象外であったため、掘削なしに撤去することができた。

門扉基礎は、既設配管の位置を確認しながらの掘削となったため、樹根①掘方と重複するように4×2.7mの範囲で不定形な掘方となった。地表下0.3mで横に広がる下部構造があり、以下は残置することとなったため掘削なしに撤去することができた。

ガス管は、市道からの引込み部分がこの下部構造を下越ししていたため、基礎の脇を地表下0.9mまで掘削して切断撤去した。地表下0.25mまで1層、地表下0.54mまで2層、地表下0.77mまで3層、以下は4層であった。ガス管は引込み箇所から急激に立ち上がり、細い鉄管へ接続していたため、両端の地上露出部分から重機を用いて引き上げ、撤去することができた。給水管も同様に撤去した。塩化ビニール製の排水管は、掘方埋土を掘削し

図11 新屋敷地区における調査地点配置図 (1/2000)



て管を露出させ撤去した。遺跡への影響はない。

樹根は、掘削を伴った21本について記録した。掘削は2層までを目安とし、そこで切断除去する方針で臨んだが、いくつかの樹根については抜取り痕が生じた。

樹根①は1.45×1.5mを掘削した。地表下0.4mで3層を確認。撤去の過程で直径0.4m、深さ0.5mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内で地表下0.65mから4層、地表下0.8mから5層を確認した。

樹根②は2.4×2.5mを掘削した。地表下0.32mから2層、地表下0.44mから3層を確認した。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根③は2.1×2.6mを掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根④は幹を中心に直径2.8mを掘削した。地表下0.3m付近で近代とみられる栗石を検出した。地表下0.43mで3層、地表下0.58mから4層を確認した。土師器・須恵器を出土している。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根⑤は1.9×1.7mを掘削した。地表下0.08mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.23mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑥は2.0×1.65mを掘削した。地表下0.25mで3層を確認。撤去の過程で直径0.9m、深さ0.31mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.46mで4層を確認した。

樹根⑦は1.75×1.7mを掘削した。地表下0.32mで2層、地表下0.4mで3層を確認し、撤去の過程で0.8×0.4m、深さ0.4mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.67mで4層を確認した。

樹根⑧は1.84×1.75mを掘削した。地表下0.32mで2層、地表下0.4mで3層を確認した。ここで切断撤去でき下位への影響はなかった。

樹根⑨は2.3×2.0mを掘削した。既設の構造物を避けたためやや不定形である。地表下0.09mで2層と栗石を検出した。地表下0.26mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑩は1.8×1.8mを掘削した。地表下0.3mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.4mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑪は1.8×1.8mを掘削した。地表下0.18mで2層と栗石を検出した。地表下0.32mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑫は1.2×1.5mを掘削した。地表下0.11mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.28mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑬は1.5×1.8mを掘削した。地表下0.26mで2層を確認し、撤去の過程で0.4×0.8m、深さ0.54mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.42mで3層、地表下0.7mで4層を確認した。

樹根⑭は1.8×1.8m、既設の構造物を避け台形状に掘削した。地表下0.14mで2層を確認した。地表下0.26m

まで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑮は1.8×1.3mを掘削した。地表下0.19mで2層を確認し、地表下0.22mで建物基礎を検出した。地表下0.29mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑯⑰⑱は掘方が接しており、また既設構造物を避けたため不定形であったが、3.8×1.4mを掘削している。樹根⑯では地表下0.16mで2層を確認し、地表下0.24mで建物基礎を検出した。撤去の過程で直径1m、深さ0.36mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.4mで3層を確認した。樹根⑰では地表下0.26mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。樹根⑱では地表下0.3mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。

樹根⑲は1.65×1.05mを掘削した。地表下0.2mで2層を確認した。地表下0.34mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑳は1.35×1.15mを平行四辺形状に掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。撤去の過程で0.3×0.4m、深さ0.25mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下

0.33mで3層を確認した。

樹根㉑は1.2×1.0mを掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。これ以上の掘削がないことを確認して立会を終了した。

写真198 樹根④撤去完了状況（東より）



写真196 調査区近景（東より）



写真197 基礎周り②掘削状況（東より）



第Ⅲ章 文化財活用活動の記録

埋蔵文化財調査センターは、1994年より実施している構内遺跡の調査成果やその重要性について、生涯教育での活用を目的として、展示などの活動を通じて大学内外に発信している。

本センターでは、前年度に実施した調査成果を速報展として公開するが、2017年度は前年4月に発生した熊本地震の影響で、構内遺跡調査の実施がなかった。このため、企画展を実施した。

このほか、オープンキャンパスやホームカミングディ、授業協力などをとおして、調査成果の公開事業を開催した。

1. 特別展示『生活道具はかわらない?』

<開催期間>

2017年12月1日～2017年4月27日

<開催場所>

埋蔵文化財調査センター展示室

<概要>

これまで実施してきた構内調査で出土した遺物について、「生活道具」という視点にたった企画展を実施した。遺物を「器」「装身具と遊具」「調理道具」「採集道具と加工具」「墓と副葬品」の5つのテーマに分け、江戸時代・近代・現代の生活道具類とともに展示し、その機能がほとんど変わらないことなどを紹介した。開催期間中は、学内外から209名の参加があった。

<掲載記事・報道>

2017年12月8日 熊本日日新聞

2017年冬期：『熊大通信』vol.67

写真199 特別展示 展示説明会実施状況



2. 熊本大学オープンキャンパス2017『熊大遺跡巡り』

<開催期間>

2017年8月5日

<開催場所>

黒髪南キャンパス

<概要>

毎年実施される、オープンキャンパスの際に、本学を訪問した高校生や保護者を対象に展示室の開放と、構内遺跡巡りを実施した。遺跡巡りでは、工学部技術部と共同開発したアプリ『クマダイ遺跡巡り』を利用した。構内に設置してある遺跡解説版すべてを巡った方には、オリジナルキャラクターをデザインしたステッカーを配布した。参加・挑戦者は21名。

写真200 センター展示見学の様子



3. 授業等への協力

・2017年4月12、19、26日、5月10日：グローバル教育カレッジの小池ウルスラ先生・チャン・チェオン・ジェン先生の授業協力と受講生48名がセンター展示室を見学。展示説明とアプリを用いた授業協力。

・2017年4月27日：文学部の木下尚子先生と約10名の学生の授業協力。

・2017年5月16日：文学部の木下尚子先生と71名（史学概論受講生）の学生の授業協力。

・グローバル教育カレッジのクリストファー・ジョンソン先生と27名の授業協力。

・2017年12月13日：文学部の小畑弘己先生と約40名の授業協力。

<掲載記事・報道>

2017年5月19日 熊本日日新聞

2017年6月5日 朝日新聞

2017年7月10日 RKK ラジオ「熊本よかもん見つけ
隊」

2017年夏期：『熊大通信』 vol.65

写真201 『クマダイ遺跡巡り』を利用した遺跡巡りの様子



Summary

In current year, we have started revival from earthquake disaster damages in earnest. The work is the normal facilities maintenance that became the reservation because of an earthquake disaster and correspondence to earthquake disaster damages. The number of investigations in the current year excavation is 3, presence investigations is 37.

In Kyomachi area, the personnel office building of the elementary school attached to faculty of education which earthquake disaster damage was heavy will be rebuilt at the same place. We carried out an presence investigation to confirm the situation of the remains around and between the building basics before dismantling. And we confirmed the situation of remains about the range of the new building (1707 excavation spot). As the result, we found some pit dwellings and postholes of Nara ~ Heian period, and relics of Jomon, Yayoi, Nara ~ Heian and modern period. The situation of the remains is fine, so this information will be useful for a construction design and the plan of our work around this area in the future.

In Kurokami south area, Kurokami south C2 (Architecture and Building Engineering, Civil and Environmental Engineering) which earthquake disaster damage was heavy will be rebuilt at the same place, too. The range of the new building is planned that a range is expanded on the north side, the east side from an existing building. Because the foundation of this building under the ground was deep in the existing building, remains were not left between building basics, but, in the neighborhood, we found remains as expected. We found some pit dwellings and three big ditches and a lot of postholes of Nara ~ Heian and modern period (1724 excavation spot). The remains in the range of the existing building have been already lost, but became valuable information to bind the investigation result that has been carried out in both East-West areas of Kurokami south area together.

For an environmental improvement project, the old administration building demolition work of the hospital attached to the medical department in Honjo north area was big work. The remains were avoided destruction between building basics of the old administration building (1708 excavation spot). At this research point, we found street ruins that leading from Kumamoto castle to Hyuga (currently Miyazaki Prefecture), was called Hyuga Oukan. It is sunken road-formed rare structure in spite of this way going along the level ground. It was recognized that the street became extinct when University hospital moved to the present location by remains. It is the magnificent results that thinking about the change of the castle town from Edo era to the Meiji era as the new knowledge.

In addition, we carried out presence investigation and excavation during the work of municipal road widening with the rebuilding of the Ryujin bridge in Kurokami north and south area, and carried out presence investigation and excavation during the update work of the lifeline in Honjo south area.

There was a notable matter this year. It is that there was the support of the investigator from research center for buried cultural properties, Kagoshima University. Successful execution of the works owes a lot to this human support in this year.

We really appreciate thank for flexible idea and correspondence of Kagoshima University, research center for buried cultural properties, Kagoshima University and facilities department, Kumamoto university very much.

금년은 구마모토 지진으로부터 본격적인 부흥을 개시한 해이다. 금년도 사업은 지진 재해 대응을 위해서 보류된 통상 시설 정비 사업과 지진 재해 피해에 대응하는 사업이다. 2017 년도에 실시한 조사는 발굴 조사 3 건, 입회 조사 36 건이다.

지진 피해가 컸던 교마치 지구의 교육학부 부속 초등학교 관리동은 같은 장소에 재건하게 되었다. 건물의 기초를 해체하기 전에 입회를 실시하고, 기초의 사이와 기초 주변을 확인했다. 아울러, 신축 건물의 범위에 대해서도 확인했다(1707 조사 지점). 그 결과 고대의 수혈주거와 주혈, 야요이시대, 고대, 근대의 유물들이 확인되었다. 유적의 잔존 상황이 양호해서, 향후, 본지구 관리동 남쪽 공사의 설계나 조사에 있어서 참고가 될 것이다.

쿠로카미 남지구의 쿠로카미 남 C2(공공학부 1호관)의 피해도 심각해서, 본건물도 같은 장소에서 재건하게 되었다. 신축 건물의 범위는 기존 건물보다 북쪽 및 동쪽으로 범위가 확장될 계획이다. 기존 건물은 지하 구조가 깊고, 기초 사이에 유적이 남아 있지 않았지만, 그 주위에서는 예상대로 고대의 유적이 확인되었다(1724 조사 지점). 수혈건물과 큰 도랑, 많은 주혈군이 검출되었다. 기존 건물 범위 내의 유적은 이미 유실되었지만, 쿠로카미 남지구 동서 양지역에서 실시되어 온 조사 성과를 잇는 귀중한 정보가 되었다.

환경 정비 사업으로서는 혼쵸 북지구의 의학부 부속 병원 구관리동 해체가 큰 사업이었다. 구관리동의 기초 사이에는 유적이 파괴되지 않고 남아 있었다(1708 조사 지점). 본조사 지점에서는 구마모토 성과 휴가(현재 미야자키현)를 연결하는 휴가 왕래(日向往還)의 구루트라고 생각되는 도로터가 발견되었다. 평지이면서 절단해서 길을 낸 드문 구조이다. 출토 유물에 의해서 부속 병원이 현재위치로 이전했을 때에 폐절된 것도 판명되었다. 에도시대부터 메이지시대에 걸친 성시의 변천을 생각하는데 있어 새로운 지견으로서 큰 성과이다.

이 외에 혼쵸 남지구의 라이프라인의 갱신사업과 관계된 입회, 발굴 조사, 쿠로카미 북, 남지구에서는 새로운 류진(龍神)다리의 가교 공사와 관계된 시도확장등사업에 관한 입회, 발굴 조사등을 실시했다.

금년도에 특별해야 할 일이 있었다. 가고시마대학 매장문화재 조사 센터로부터 조사원의 지원이 있었던 것이다. 금년도의 사업을 수행할 수 있던 것이 이 인적 지원이 기여할 바가 컸다. 유연한 발상과 대응을 해 주신 가고시마대학, 가고시마대학 매장문화재 조사 센터, 및 본대학 시설부에는 감사 말씀드립니다.

付篇 1 2017年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1. 熊本大学埋蔵文化財調査センター規則 (H29.4.1～)

(趣 旨)

第1条 この規則は、熊本大学学則（平成16年4月1日制定）第9条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に関し必要な事項を定める。

(設置目的)

第2条 センターは、熊本大学（以下「本学」という。）に所在する遺跡を発掘調査するとともに、出土した埋蔵文化財を記録、研究、保存及び活用し、もって本学の教育研究に寄与することを目的とする。

(業 務)

第3条 センターは、次に掲げる業務を行う。

- (1) 埋蔵文化財調査の実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 出土した埋蔵文化財の整理・研究、保管及び保存に関すること。
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。
- (4) その他センターの目的を達成するために必要な事項。

(職 員)

第4条 センターに、次に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長の選考は、本学の専任の教授のうちから、第7条に規定する委員会の推薦に基づき、学長がおこなう。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 センター長に欠員が生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第6条 専任教員の選考は、熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会の議に基づき、学長がおこなう。

2 専任教員の選考に関し必要な事項は、別に定める。

(委員会の設置)

第7条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、熊本大学埋蔵文化財調査センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(委員会の組織)

第8条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任教員
- (3) 文学部及び教育学部から選出された教授又は准教授 各1人
- (4) 法学部、大学院社会文化科学研究科又は大学院法曹養成研究科から選出された教授又は准教授 1人
- (5) 大学院先端科学研究部から選出された教授又は准教授 2人
- (6) 大学院生命科学研究部の医学系又は医学部附属病院から選出された教授又は准教授 1人
- (7) 大学院生命科学研究部の保健学系及び薬学系から選出された教授又は准教授 各1人
- (8) 発生医学研究所、生命資源研究・支援センター又はエイズ学研究センターから選出された教授又は准教授 1人
- (9) 運営基盤管理部施設管理課長
- (10) その他センター長が必要と認めた者 若干人

2 前項第3号から第8号まで及び第10号の委員は、学長が委嘱する。

3 第1項第3号から第8号までの委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 第1項第3号から第8号までの委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

5 第1項第10号の委員の任期は、学長が委嘱の都度定めるものとし、再任を妨げない。

(委員会の審議事項)

第9条 委員会は、センターに関する次に掲げる事項（熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会規則（平成16年4月1日制定）第3条に定める事項を除く。）を審議する。

- (1) センターの業務に関すること。
- (2) センター長候補者の推薦に関すること。
- (3) 施設及び予算に関すること。
- (4) その他センターの管理運営に関すること。

(委員長)

第10条 委員会に、委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第11条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第12条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を委員会に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第13条 センター及び委員会の事務は、運営基盤管理部施設企画ユニットにおいて処理する。

(雑則)

第14条 この規則に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。

2 国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則（平成16年4月1日制定）及び熊本大学埋蔵文化財調査室要項（平成16年4月1日制定）は、廃止する。

3 この規則施行後、最初に任命されるセンター長は、第5条第1項の規定にかかわらず、この規則により選考されたものとみなす。

4 この規則施行後、最初に任命されるセンター長の任期は、第5条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

5 この規則施行後、最初に委嘱される第8条第1項第3号及び第4号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成24年12月27日規則第142号）

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則（平成27年3月13日規則第94号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成28年2月5日規則第9号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年3月1日規則第30号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年9月23日規則第404号）

この規則は、平成28年9月23日から施行する。

附 則（平成29年3月31日規則第153号）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

2. 2017年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1 埋蔵文化財調査センター組織

<センター長>	(併・文学部教授)	伊藤 正彦 (2017.4.1～)
<専任教員>		大坪 志子 山野ケン陽次郎
<技術補佐員> (2015年5月～)		吉留 広
	(2017年4月～)	土野 雄貴
<事務補佐員> (2016年4月～)		濱田 春美
<室内作業員> (2017年4月～2018年3月)		園田 智子 後藤 恵 江口 路 鬼塚 美枝 小山 正子 井上 裕美 首藤 優子 末吉 美紀 増井 弘子
	(2017年6月～2018年3月)	
	(2017年6月～9月)	

2 埋蔵文化財調査センター運営委員会

委員長	伊藤 正彦 (埋蔵文化財調査センター長)	任期 (2017.4.1～2019.3.31)
委員	小畑 弘己 (文学部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	神野 雄二 (教育学部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	平田 元 (大学院法曹養成研究科教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	中田 晴彦 (大学院先端科学研究部准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	伊東 龍一 (大学院先端科学研究部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	宇宿 功市郎 (医学部附属病院教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	米田 哲也 (大学院生命科学研究部保健学系准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	杉浦 正晴 (大学院生命科学研究部薬学系准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	古嶋 昭博 (生命資源研究・支援センター准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	松下 栄司 (運営基盤管理部施設管理課長)	
	伊藤 正彦 (埋蔵文化財調査センター長)	(2017.4.1～2019.3.31)
	大坪 志子 (埋蔵文化財調査センター専任教員)	
	山野ケン陽次郎 (埋蔵文化財調査センター専任教員)	

審議事項

2017年5月10日

議題

- 1) 平成29年度埋蔵文化財包蔵地における土木工事予定一覧について
- 2) 平成29年度埋蔵文化財調査センター予算配分(案)について
- 3) 埋蔵文化財調査センター教員の任期制見直しについて
- 4) 埋蔵文化財調査センター教員の人事計画について
- 5) その他

報告

- 1) 平成28年度埋蔵文化財発掘調査結果一覧について
- 2) 平成28年度埋蔵文化財調査センター予算の支出実績について
- 3) その他

付篇2 埋蔵文化財調査センター2017年度調査・研究活動記録

【調査員】

大坪志子

<研究発表>

- ・「蛍光 X 線分析 (XRF) と主成分分析 (PCA) の石材研究への利用」考古学研究会岡山2017年11月例会 (2017年11月11日, 岡山大学) (共同: 森康 (北九州市立自然史・歴史博物館)).

<科学研究費>

- ・『九州縄文時代後晩期における玉と縄文文化の実証的研究』平成29~32年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (研究代表者).

<講演>

- ・「石製装身具の現在と研究法」宮崎県考古学会総会 (2017年6月4日、生日の杜遊古館).

<その他>

- ・大分県法垣遺跡出土石製装身具に関する所見『法垣遺跡3・4次調査』中津市文化財調査報告第84集, 中津市教育委員会, pp.143.
- ・長崎県原の辻遺跡調査指導委員会 (2017年12月11日、長崎県埋蔵文化財センター).
- ・熊本県幅・津留遺跡出土石製装身具に関する専門調査 (2018年2月25-26日, 愛媛大学).
- ・熊本大学オープンキャンパス2017 2017年8月5日.

山野ケン陽次郎

<論文>

- ・「琉球列島における縄文時代後晩期の貝製品と製作技術」『鹿児島考古』(47), pp.25-34.

<科学研究費>

- ・平成29年度科学研究費助成事業「先史時代におけるマリアナ諸島の貝類利用の考古学的研究」若手研究 (B) 研究代表者.
- ・平成29年度科学研究費助成事業「3~7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究」基盤研究 (B) 研究分担.

<講演>

- ・平成29年度熊本県高等学校教育研究会地学部会総会「熊本大学黒髪南キャンパスの発掘調査-遺跡は何を語るのか-」(2017年5月26日, 男女共同参画センター はあもにい).

<その他>

- ・天城町下原洞穴遺跡出土貝製品に関する所見 2018年3月19日~21日.
- ・RKK ラジオ番組「小松士郎のラジオのたまご」 2017年7月10日.
- ・熊本大学オープンキャンパス2017 2017年8月5日.

付篇3 埋蔵文化財調査センター2016年度新聞記事

図12 「熊大遺跡 アプリで「発掘」」

(朝日新聞 2017年6月5日23面転載)

図13 「熊大の遺跡 アプリと巡る」

(熊本日日新聞 平成29年5月19日12面転載)

報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさせんたーねんぽう 24
書名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 24
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報
シリーズ号	24
編著者名	伊藤正彦・大坪志子・新里貴之・山野ケン陽次郎・吉留広・土野雄貴・濱田春美
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査センター
所在地	〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1 TEL.096-342-3832 FAX.096-342-3832
発行年月日	2019年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうまちだい 京町台遺跡 (1707地点)	くまもと 熊本県 くまもと 熊本市 きょう 京町	43201	238	32° 49' 3"	130° 42' 16"	20170703 ～ 20170828	582.01㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (1708地点)	くまもと 熊本県 くまもと 熊本市 ほん 本庄	43201	285	32° 47' 47"	130° 42' 45"	20170703 ～ 20180719	4691.71㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
くろかみまち 黒髪町遺跡群 (1724地点)	くまもと 熊本県 くまもと 熊本市 くろ 黒髪	43201	278	32° 48' 48"	130° 43' 40"	20171225 ～ 20180413	405.70㎡	学校敷地内の開発事業に伴う

※北緯・東経の数値は世界測地系に基づく値です

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
きょうまちだい 京町台遺跡 (1707地点)	集落址	縄文・弥生・古代	竪穴建物・溝・ピット	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・青銅製品	—
ほんじょう 本庄遺跡 (1708地点)	集落址	古代・近世・近代	道・竪穴建物・柱穴	土師器・須恵器・陶磁器	
くろかみまち 黒髪町遺跡群 (1724地点)	集落址	古代・近現代	竪穴建物・溝・柱穴・ピット・近代建物基礎	土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品・貨幣	

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報24
—2017年度—

平成31年 3月27日 印刷
平成31年 3月29日 発行

編集兼発行者 熊本大学埋蔵文化財調査センター
熊本市中央区黒髪 2-39-1
電話 (096) 342-3832
印刷所 シモダ印刷株式会社

**Published by
Research Center for Buried Cultural Properties,
Kumamoto University
Kumamoto, 2019**